
エネルギー

ペケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エネルディンガー

【Nコード】

N8415I

【作者名】

ペケ

【あらすじ】

女の子と、森に住むモノのお話

昔あるところに、目の見えない女の子がいました。心優しい女の子で、森の近くの小さな小屋に、病気のおばあさんと一緒に暮らしていました。

森は昼でも暗く不気味でしたが、女の子は平気です。杖をつきながら毎日森へ入り、病気のおばあさんのために薬草を探していました。女の子は森に住むたくさんの動物たちとお友達です。森の中でリスさんやキツネさんに会つと、こんにちはと挨拶をします。動物たちも女の子を見つけると近付いてきて、楽しくおしゃべりをします。

中でも一番の仲良しは、エネルギー先生です。エネルギー先生は昔から森に住んでいて、とても物知りです。そして女の子にいろいろなことを教えてくれます。それにいつも果物をくれたり、薬草を探すのを手伝ったりしてくれます。女の子はエネルギー先生が大好きでした。

ある日の夜、女の子が夕食の支度をしていると、隣の村に住む獵師さんが尋ねてきました。

「こんばんは。いいにおいだね。今夜はシチューかい？」

「あら獵師さん、こんばんは。今ちょうどできたところなの。一緒にいかが？」

獵師さんは笑います。

「いや、遠慮しておくよ。もう夕食は食べてきたからね。ところでおばあさんの具合はどうだい？」

「ええ、元気いっぱいですわ。森の薬草はとても効くみたいなの」「それは良かった。でも森にはあまり近付かない方がいいよ。森はとっても危険なんだから」

「どうして？」

女の子が尋ねると、獵師さんは真剣な声で言いました。

「実はね、森には恐ろしい怪物が住んでいるんだよ」

「まあ！ 怪物ですって！」

女の子は両手で口を押さえて驚きます。

「昔から森に住んでいる怪物でね、森の主なんだ。いつもは森の奥深くにいるんだが、ここ最近その怪物が村を襲うようになってね。畑を荒らしたり家畜を殺したりするんだよ。僕たちもこのまま黙ってみているわけにはいけないから、交代で森を見回ってるんだ。君も気をつけるんだよ」

「まあ、そうでしたの。私全然知りませんでしたわ。わざわざありがとうございます」

女の子はにっこりと笑いました。

「それでは今晚はこれくらいで失礼するよ。くれぐれも、気を付けるんだよ」

「承知しましたわ。あなたも、どうかお気をつけくださいな」

獵師さんは女の子の小屋を後にしました。

女の子はおばあさんにシチューを食べさせながら、あることに気が付きました。

「そうだ、怪物が出るって、森のみんなにも知らせなきゃ。あと、エネルギー先生にも」

そう言いかけて、女の子はぷつと吹き出してしまいました。

「私ったら、エネルギー先生ならもう怪物のことはご存じのはずね。だってあの方は、とっても賢いのだもの」

そう言っただけの女の子は、おばあさんと一緒に食事を続けました。

次の日、女の子は朝から森へ出かけました。おばあさんの薬を作るための薬草を取りに行くのです。女の子にとって森は自分の庭も同然ですから、木にぶつかったり転んだりはしません。もちろん、昨日獵師さんに言われたことを忘れてはいません。耳を澄ませて、怪物の足音がしないか確認します。もし怪物が現れたら、急いで逃

げるつもりです。女の子は目が見えませんが、足は速かったのです。森に入ると、さっそくリスさんが来て、女の子とおしゃべりを始めます。

「おはようリスさん。今日も気持ちがいいわね」

女の子は森の中が大好きでした。けど最近、森が少し元気をなくしているような気がします。動物たちも前より元気がなく、女の子は心配でした。

暖かい森の中で、女の子は薬草をつみます。何の薬草かはおいと手触りで分かります。エネルギー先生が教えてくれたのです。先生はとも物知りですから、女の子に薬の作り方も教えてくれました。その薬はよく効いて、おばあさんの病気も治りかけていました。女の子にとって先生は恩人なのです。

薬草をつみ終わると、女の子は森の奥にあるエネルギー先生の家に向かいました。貴重な薬草をもらいに行くのです。エネルギー先生は森の奥深くにあつて、大きな木の中にあります。ふかふかの落ち葉が敷かれていて、とてもいいにおいがします。「エネルギー先生、こんにちは」

「やあ、こんにちは」

ゆったりとした威厳のある声が返ってきます。エネルギー先生はいつも家の奥にいて、あまり顔を出しません。でも女の子が声をかけたらちゃんと返事してくれます。

「先生、また薬草を少し分けてくださいませんか？」

「ああ、好きなだけ持って行きなさい。場所は分かるね？」

「はい。ありがとうございます」

女の子はつるで編まれたカゴの中から薬草を少しだけ分けてもらいました。

「先生、最近森が少し元気ないみたいなんです。動物たちも元気がないんです」

エネルギー先生は答えます。

「そうだね。近頃は人間たちがよく森に入って、木を切っているよ

うだからね。私もほとんど困っているんだ。人間たちは森を傷付けすぎている。このままじゃ森は滅んでしまうかもしれない」

「そんな！ そんなの嫌よ、私！」

女の子は泣き出してしまいました。エネルギー先生は優しく笑って、言いました。

「君は本当にいい子だね。すべての人間たちが君のように森を愛し、動物の心が分かる優しさを持っていれば、こんなことにならなかったのかもしれないね。さあ、涙を拭いてそろそろお帰り。もうじき嵐がやってくる。嵐が来ている間は、小屋を出てはいけないよ」

女の子は泣きやんで、うなずきます。

「はい、エネルギー先生。さようなら」

「さようなら。気をつけて帰るんだよ」

女の子はエネルギー先生に手を振って、小屋に帰りました。

その日の夕方、女の子は薬箱の中を開けてみて、あることに気付きました。

「まあ、大変。ケフェル草を切らしてしまっているわ」

ケフェル草は貴重な薬草で、森の奥深くに生えていました。とても珍しいものなので、エネルギー先生しか持っていないせん。

「困ったわ。あれがないと、おばあさまの薬を作れない」

外はもう陽が傾きかけていました。それに雨のにおいがしました。もうすぐエネルギー先生が言っていた嵐が来るかもしれないせん。

「仕方ないわ。今からエネルギー先生のところへ行ってもらってこよう」

女の子は怪物の話を思い出します。とても怖かったのですが、薬を作るためにはどうしてもケフェル草が必要です。女の子は勇気を出して、森に行くことにしました。

女の子は森に入りました。杖で足元を確かめながら、かけ足に進みます。怪物の足音もしませんし、小鳥たちもくつろいで羽の手入

れをしていたので、どうやら近くに怪物はいないようです。

空が暗くなり、雲が見る見る立ち込めてきました。やがて森には、バケツをひっくり返したような雨が降ってきました。

雨はどんどん強くなります。木々は風に吹かれてゴーゴーと揺れ、森の動物たちはみなどこかに行ってしまうました。小川は溢れ、今では洪水になっています。

「こんなに降ってくるなんて……キャッ！」

女の子は足を滑らせてしまいました。転んだ拍子に女の子は頭をぶつけて気を失ってしまいました。

そんな女の子に近付いてくる大きな影がありました。身体は熊よりももっと大きく、その毛皮はゴワゴワしていかたとがっています。手足は丸太のように太くて、するどい爪がありました。口は裂け、大きな歯が並んでおり、目は飢えた獣のように光っています。それは森の主の怪物でした。

怪物は女の子を抱きかかえると、ウオオーと叫びました。その声は森を揺らし、大地に響きました。怪物はのっしのっしと歩きながら、森の奥に向かいました。

ガン！

突然、森の中に鉄砲の音が響き渡りました。弾は怪物に当たり、怪物は痛み之余り女の子を落してしまいました。

「この怪物め！ その子をはなすんだ！」

獵師さんが走って来て、鉄砲で怪物を撃ちます。

ガン！ ガン！

獵師さんは女の子が心配で、小屋まで行つたのです。そこで、女の子が森に行つたとおばあさんから聞かされました。そして森へ入り、たったいま怪物にさらわれている女の子を見つけたのです。

「ええい、怪物め！ これでも喰らえ！」

ガン！ ガン！ ガガン！

獵師さんは鉄砲の名人です。鉄砲の弾は全部怪物に命中しました。怪物は大きく吠え、たまらず逃げ出します。それを追いかけながら、獵師さんがとどめを刺します。

ガン！

森の怪物はどつと倒れ、それ以上動きませんでした。獵師さんはそれを見届けると、女の子に駆け寄りました。

「しっかりしなさい」

女の子は気がつきました。そして獵師さんの顔に手を伸ばします。

「獵師さん？ どうしてここに？ 私ったら、どうしたのかしら？」

「怪物に襲われたのです」

女の子は驚きます。

「まあ、怪物に？」

「ええそうです。もう少しで食べられるところでした。でももう大丈夫。怪物は死にました」

女の子はそれを聞いて、につこりとほほ笑みます。

「それじゃあ、あなたが助けてくれたのね。ありがとう」

女の子は立ち上がり、あつと口を覆います。

「そうだ私、エネルギー先生のところへ薬草をもらいに行かなきゃいけないんだわ」

「エネルギー先生？」

「はい、森の奥に住む、とっても物知みな方です。ケフェル草がないと、おばあさまの薬が作れないんです」

「ですが、今は嵐がひどい。行くのはやめなさい」

「でも……」

「エネルギーンガー先生も、きっとそうおっしゃるでしょう。大丈夫、明日一緒に行きますから」

「そうですね。分かりました。今日はもう帰ります」

そう言つて、女の子は獵師さんと一緒に小屋へ戻りました。

次の日、嵐が収まつてから女の子は獵師さんと一緒にエネルギーンガー先生の家に行きました。

エネルギーンガー先生は、どこにもいませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8415i/>

エネルギー

2010年10月15日21時17分発行